

## 第13回 SGRA-V カフェ 「ポスト・コロナ時代の東アジア」

|           |  |
|-----------|--|
| 日 時       | 2020年7月18日(土) 日本時間 15:00~16:30   |
| 参加方法      | Zoomによる(オンライン)   |
| 言 語       | 日本語のみ  |
| 講 師       | 林 泉忠(りん・せんちゅう)   |
| 司 会       | 李 彦銘(リ・イェンミン)  |
| コメンテーター   | 下荒地 修二(しもこうじ・しゅうじ)、南 基正(ナム・キジョン)   |
| 会費・定員     | 無料・100名(人数に達した時点で申込を締め切らせていただきます)  |
| 主 催       | (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA) <a href="http://www.aisf.or.jp/sgra/">http://www.aisf.or.jp/sgra/</a>  |
| 協 力       | ノボテル センチュリー 香港   |
| 参加申込・お問合せ | SGRA 事務局 <a href="mailto:sgra-office@aisf.or.jp">sgra-office@aisf.or.jp</a>  |
| 申込内容      | <p>(1) お名前、(2) 居住国/都市、(3) ご所属、(4) Zoom 接続用メールアドレス</p> <p>※ 事前参加登録していただいた方に、カフェ前日の午前中に招待メールをお送りします。</p> <p>※ 事前に Zoom 接続テストをご希望の方は、参加申込メールでお知らせください。担当者よりテスト日について折り返しご連絡差し上げます。接続方法、ミュート機能のON/OFFの切り替え、チャットの見方などについてご不安な方はどうぞお気軽にご連絡ください。</p>   |
| プログラム     | <p>14:45 Zoom 接続開始</p> <p>15:00 開会挨拶・講師およびコメンテーターのご紹介</p> <p>15:10 講演：林泉忠</p> <p>15:50 コメント：下荒修二、南基正</p> <p>16:10 質疑応答</p> <p>16:25 まとめ・閉会挨拶</p> <p>16:30 終了</p> <p>16:33 懇親会開始</p> <p>17:30 懇親会終了予定(遅くとも18:00前には終了)</p>   |
| 注意事項      | <p><b>【マイクとビデオについて】</b></p> <p>雑音を避けるため、質問される際を除きカフェ開催中はミュート状態(音が入らない状態)に設定をお願いいたします。また、ビデオについてはカフェの双方向性を保つために可能な限りONに設定していただきたく存じます。ご協力のほどお願い申し上げます。</p> <p><b>【質疑応答について】</b></p> <p>ご質問のある方は Zoom のチャット機能にご自身のお名前とご質問内容(20字以内)をお書きください。時間が限られておりますので、司会者がチャットの質問の中から選びます。司会者から指名を受けた方はマイク・ビデオともにONの状態でご質問の全体をご発言ください。</p> <p><b>【その他】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講師による発表資料は画面共有機能で投影いたします。</li> <li>・当日の講演、コメント、および質疑応答の内容は、後日 SGRA レポートとして発行する予定です。</li> </ul> |

## 【講演趣旨】

世界を震撼させた2020年の新型コロナウイルスが世界システムをかく乱し、「ポスト・コロナ時代」の国際関係の再構築が求められる中、東アジアはコロナの終息を待たずに、すでに激しく動き始めている。

コロナが発生するまで、中国のアメリカと日・韓の分断戦略はある程度が効いた。しかし、コロナ問題と香港問題によって「米中新冷戦」が一気に進み、今まで米中間のバランスの維持に腐心してきた日韓の選択が迫られる。とりわけ日中の曖昧な「友好」関係の継続はいよいよ限界に達し、日本の主体性ある「新アジア外交戦略」が模索され始めている。

中国による「国家安全法」の強制導入で、香港は一気に「中国システム」の外延をめぐる攻防の激戦地になり、米中新冷戦の最前線になる。香港という戦略上の緩衝地帯を喪失する台湾は、「台湾問題を解決する」中国からの圧力が一段と高まり、アメリカとの安全保障上の関係強化を一層求めることとなり、台湾海峡は緊迫した時代に回帰する。

「ポスト・コロナ時代」における「米中新冷戦」が深まっていくことはもはや回避できない。

## 【講師略歴】



### ■ 林泉忠（りん・せんちゅう LIM, John Chuan-Tiong）

国際政治学専攻。2002年東京大学より博士号を取得（法学博士）。同年より琉球大学法文学部准教授。2008年よりハーバード大学リサーチ・アソシエイト、2012年より台湾中央研究院近代史研究所副研究員、国立台湾大学兼任副教授、2018年より台湾日本総合研究所研究員、香港アジア太平洋研究センター研究員、中国武漢大学日本研究センター長、香港「明報」（筆陣）主筆、を歴任。

著書に『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス：沖縄・台湾・香港』（明石書店、2005年）、『日中国力消長と東アジア秩序の再構築』（台湾五南図書、2020年）など。

## 【コメンテーター略歴】

### ■ 下荒地 修二（しもこうじ しゅうじ SHIMOKOJI Shuji）

日本の元外交官、中国、韓国などの勤務を経て、駐パナマ大使や駐ベネズエラ大使を歴任。

### ■ 南基正（ナム・キジョン Nam Ki-Jeong）

専門は戦後日本政治外交。東京大学で「朝鮮戦争と日本—‘基地国家’における戦争と平和」の研究で博士号を取得。東北大学法学研究科助教授・教授、韓国・国民大学国際学部副教授、ソウル大学日本研究所副教授を経て、同研究所教授。

## 【司会者略歴】

### ■ 李彦銘（リ・イェンミン LI\_Yanming）

専門は国際政治、日中関係。北京大学国際関係学院を卒業してから来日し、慶應義塾大学法学研究科より修士号・博士号を取得。慶應義塾大学東アジア研究所現代中国研究センター研究員を経て、2017年より東京大学教養学部特任講師。

- I. コロナ問題による国際関係の在り方への影響
1. コロナによってもたらされること：グローバル時代の終焉？
    - ① 海外サプライ・チェーンの中断による国内への帰還傾向
    - ② 国境を越える人と人の交流が激減する
      - 自国第一主義・ナショナリズムの温床に？
  2. 中国と西側主導の国際社会の距離が増幅へ
    - ① コロナ対応による中国・西側間の不信感
    - ② コロナ期間における中国の「香港国安法」の強制導入と西側の反発
      - 米中新冷戦の顕在化、本格化の契機に？
- II. 米中角逐を軸とする北東アジアのポスト・コロナ情勢
1. 日・韓の米・中との関係のバランスをどう維持するのか
    - ① 同盟国・安全保障のアメリカ Vs. 隣国・経済の中国
    - ② 進む中国の米・日韓の分断戦略
    - ③ 日韓軋轢 → 中国・米国にとって戦略上のメリットとデメリット
  2. 日中関係：「疑似蜜月」から「中熱日冷」へ
    - ① 脆弱性に富む中国主導の「日中友好」
    - ② 日中の曖昧な「友好」関係の継続は限界に達し始めた
    - ③ 日本の対中イメージ悪化で難くなる習近平の「国賓」訪日
      - 香港問題で、日本の対中政策の転換加速へ
  3. 中韓関係：互いに第三者をよく意識する不思議な隣国外交
    - ① 中国：中韓関係を常に朝鮮半島のバランスと対米戦略の一環で考える
    - ② 韓国：放棄できない対北戦略における中国役割への期待、時には対米カードの側面も
      - ◆ 対中親近感の低下と主体性欠く対中外交はいつまで続くか
- III. 中国の影響力が一気に進む中国（本土）・香港・台湾関係の変化
1. 中国（本土）・香港関係
    - ① 「香港国安法」の強制導入から見た全体主義の権力思考様式
    - ② アメリカ・西側の反発：香港地位の見直し、中国への非難、制裁
      - 香港は米中角逐の新たな戦場に
  2. 兩岸（中台）関係
    - ① 予想外のコロナ効果：「中国との距離維持は悪いこととは限らない」
    - ② 中国、「香港制圧」に示される「台湾問題解決」の自信 → 台湾に一層圧力を
    - ③ 台湾、安全保障戦略における香港という緩衝地帯を喪失する → 対米依存増幅へ
      - 米台関係がより緊密化になり、台湾海峡は再び緊迫状態に
- IV. ポスト・コロナ時代：一層進む米中新冷戦
1. 東アジアにおける米中衝突が激しくなる：香港・台湾は激戦地に
    - ◆ 西側反発の背景：「自由主義世界の一角の崩壊」による危機感
      - 「防波堤」の香港は「中国システム」の外延をめぐる攻防の最前線に
  2. 11月アメリカ大統領選による影響
    - バイデン氏が勝てば、「アジアへの回帰」加速へ
  3. 米中新冷戦はもはや回避できない ← 対中認識における米与野党の合意
    - 「中国ブロック」と対決する強固な「アメリカ・ブロック」の形成は可能か？
  4. 日本、主体性ある対中外交への転換と「新アジア外交戦略」の模索
    - 台頭する中国と異なる、「自由で開かれたアジア」のリーダーシップ確立へ